HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	タタール語の非動詞述語文における主語人称標示
Author(s)	菱山, 湧人
Citation	北方言語研究, 10, 83-98
Issue Date	2020-03-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77604
Type	bulletin (article)
File Information	05_83_98.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 10: 83-98（日本北方言語学会 2020）

タタール語の非動詞述語文における主語人称標示

菱 山　湧 人
（東京外国語大学大学院博士後期課程）

キーワード：タタール語、非動詞述語文、述語人称標識、モダリティ

0. はじめに

タタール語[1]は多くのチュルク諸語と同様に、主語の人称・数と一致する述語人称標識[2]を持っている。先行研究によると、現代タタール語の非動詞述語文[3]ではその使用はまれで、主に感情表出やモーダルのニュアンスを伴って、強調して述べる必要がある場合に用いられるという。本稿ではコーパス調査に基づき、特に一部の感情形容詞と位格述語、不定形＋モーダル述語、モーダル小辞を述部に持つ肯定文で当該の人称標識の出現頻度が高めであることを示す。このことからタタール語の非動詞述語文では、感情表出や強調、断言や判断などのモダリティを表す表現において当該の人称標識が用いられる傾向があると言え、先行研究の記述が定量的調査からも裏付けられることを主張する。

本稿の構成は次の通りである。まず第 1 節で先行研究の記述を要約し、第 2 節で調査方法と調査結果、第 3 節でまとめと考察、第 4 節で今後の課題を述べる。

なお、特にことわりのない限り、外国語文献の翻訳、ラテン文字転写[4]、例文番号、グロス、日本語訳、文字飾り、表は筆者による。出典記載のない例文は、特にことわりのない限り、第 2 節で述べるコーパスから得られたものである。

1. 先行研究

本節では、1.1 節で Xisamova (2006) と Zakiev et al. (1993) 、1.2 節で Ersen-Rasch (2009) と服部 (1940, 1950) の記述を要約し、1.3 節で問題提起を行う。

1.1. Xisamova (2006), Zakiev et al. (1993)

Xisamova (2006) と Zakiev et al. (1993) のいずれも、名詞述語などに接尾するものを述語性接辞 (хәбәрлек кушымчасы / аффиксы сказуемости) （表 1）[5]として名詞の文法範疇に入

---

[1] チュルク諸語に属し、基本語順は SOV。主にロシア連邦タタールスタン共和国やバシコルトスタン共和国で話される、2010 年の全ロシア国勢調査によると、ロシア国内の話者数は約 428 万人である。(Ethnologue より要約)

[2] タタール語の述語人称標識はいくつかあるが、主なものは、動詞の現在形、完了形、未来形等や非動詞述語に接尾するもの（I 型）と、動詞の過去形と条件形に接尾するもの（II 型）である。本稿は非動詞述語文を扱うため、本稿で述語人称標識と言った場合は I 型を指す。

[3] 本稿では、述部が定形動詞以外であり、かつ述部に述語人称標識が接尾しうる文を非動詞述語文とする。

[4] 例文中のロシア語の音韻体系に従って発音される比較的新しいロシア語からの借用語のラテン文字転写は Timberlake (2004: 25) にある linguistic 方式に従う。異なる転写法であることを示すため、それらの借用語は斜字体で示す。

[5] タタール語では、母音調和あるいは子音同化に従って、接辞や接語中の音が交替する。便宜上、本稿では接辞や接語中の変化する音を大文字で表した代表形を用いる（例えば表 1 の *-DEr* は、四つの異形態 *-dir*

れ、一方で動詞述語に接尾するものを人称接辞 (зат кушымчасы / личные аффиксы) （表 2）として動詞の文法範疇に入れている。

表 1：タタール語の述語性接辞

	SG	PL
1	*-mEn*	*-bEz*
2	*-sEŋ*	*-sEz*
3	*-DEr*	

表 2：タタール語の人称接辞

	SG	PL
1	*-mEn*	*-bEz*
2	*-sEŋ*	*-sEz*
3	Ø	-(Ø)*Lar*

（Xisamova 2006: 72, 170 と Zakiev at al. 1993: 56, 88 をもとに筆者作成）

述語性接辞に関して Xisamova (2006: 72) は、名詞が文において述語として機能することを示す接辞だとしている。Zakiev et al. (1993: 56) は、述語として機能する名詞および他の全ての名詞的品詞に接尾し、動詞の人称接辞と同様に人称と数を同時に示すものだとし、以下の例を挙げている。

(1) Min ešče *krest'jan* Qïzïl *Armija*-se-neŋ ber *soldat*-ï-**mïn**.
1SG 労働者 農民 赤 軍-3SG.POSS-GEN 一 兵士-3SG.POSS-1SG
「私は労働者・農民赤軍の兵士だ。」

(Zakiev at al. 1993: 56)

(2) Balïq qaptïr-uw minem bäläkäy čaq-tan uq söy-gän eš-em-**der**.
魚 釣る-VN 1SG.GEN 小さい 頃-ABL EMPH 好き-PTCP.PST こと-1SG.POSS-3[6]
「魚釣りは私の子供のころから好きなことである。」

(Zakiev at al. 1993: 56, 57)

Xisamova (2006: 72, 73) は述語性接辞について、20 世紀初頭の文語ではよく見られたが、現代タタール語においては、感情表出またはモーダルのニュアンスとともに、つまり特に強調して言う必要があるときに主に使われると述べ、以下の例を挙げている。

(3) a. Min uqïtuwčï-**mïn**! b. Sez ǰawaplï-**sïz**!
1SG 教師-1SG 2PL 責任がある-2PL
「私は教師だ！」 「あなたに責任がある！」

(Xisamova 2006: 75)

/ *-der, -tür / -ter* の代表形である）。

[6] 先行研究は (2) の *-der* を三人称の述語性接辞としているため、3 人称のグロスを振った。しかし、1.3 節で後述するように、筆者は *-der* を三人称の標識であるとはみなさない。

Zakiev et al. (1993: 57) も、述語性接辞の使用は現代タタール語ではまれであるとし、それらは人称代名詞に取って代わられているとしている。

(4) a. Min uqïtuwčï. b. Sin uqïtuwčï. c. Ul uqïtuwčï.
1SG 教師 2SG 教師 3SG 教師
「私は教師だ。」 「君は教師だ。」 「彼／彼女は教師だ。」
(Zakiev et al. 1993: 57)

上述のように、Xisamova (2006) と Zakiev et al. (1993) は、1）非動詞述語に付くものは述語性接辞であるとして動詞述語に付く人称接辞と区別し、2）述語性接辞の使用は現代タタール語ではまれで、特に強調して言う必要があるときに使われるとしている。

1.2. Ersen-Rasch (2009)、服部 (1940, 1950)

上述のように Xisamova (2006) と Zakiev et al. (1993) は、非動詞述語に付くものは述語性接辞であるとして、動詞述語に付く人称接辞と区別している。一方、Ersen-Rasch (2009) や服部 (1940) はそのような区別をしていない。Ersen-Rasch (2009: 12) は表 3 のものをタタール語の接尾人称代名詞 (die angehängten Personalpronomina) であるとし、それが *šat*「嬉しい」に接尾した例（表 4）を挙げている。

表 3：タタール語の接尾人称代名詞

	SG	PL
1	*-mEn*	*-bEz*
2	*-sEŋ*	*-sEz*
3	Ø	Ø/*-LAr*

表 4：*šat*「嬉しい」に付く接尾人称代名詞

	SG	PL
1	*min šat(-mïn)*	*bez šat(-bïz)*
2	*sin šat(-sïŋ)*	*sez šat(-sïz)*
3	*ul šat*	*alar šat*

(Ersen-Rasch 2009: 12 を基に筆者作成)

Ersen-Rasch (2009: 12) は、これらの形式が接語 (Klitika) とも呼ばれるとしている。1.1 節で挙げた先行研究と同様に Ersen-Rasch (2009: 12) は、これらが現代タタール語ではよく省略され、その場合は人称代名詞がなければならないと記述している。Ersen-Rasch (2009) は動詞の現在形、完了形、未来形などに関する項目で、これらに接尾人称代名詞が接尾すると説明している。

服部 (1940) は同様の形式を「述語人称語尾」とし、名詞述語（表 5）、形容詞述語、位格述語（表 6）、動詞の現在形（表 7）・完了形（表 8）・未来形などに接尾した例を挙げている。ただし、現代タタール語の非動詞述語文でこれらがよく省略されることへの言及はない。

表 5：*tatar*「タタール人」

	SG	PL
1	*tatar-mïn*	*tatar-bïz*
2	*tatar-sïŋ*	*tatar-sïz*
3	*tatar*	*tatar-lar*

表 6：*monda*「ここに」

	SG	PL
1	*monda-mïn*	*monda-bïz*
2	*monda-sïŋ*	*monda-sïz*
3	*monda*	*monda-lar*

表 7：*yaz-*「書く」（現在形）

	SG	PL
1	*yaz-a-mïn*	*yaz-a-bïz*
2	*yaz-a-sïŋ*	*yaz-a-sïz*
3	*yaz-a*	*yaz-a-lar*

表 8：*yaz-*「書く」（完了形）

	SG	PL
1	*yaz-ɣan-mïn*	*yaz-ɣan-bïz*
2	*yaz-ɣan-sïŋ*	*yaz-ɣan-sïz*
3	*yaz-ɣan*	*yaz-ɣan-nar*

(服部 1940: 4, 5 を基に筆者作成)

Ersen-Rasch (2009: 12) は、これらの形式が接語 (klitika) とも呼ばれるとしている。服部 (1950: 14, 15) は、トルコ語の形式は様々な自立形式につき、二つの形式の間に別の単語が現れる（例：*sev-iyor* ***mu***=*sun* [愛する-PRS Q=2SG]「君は愛しているか？」）という点から附属語としている。一方で、タタール語の形式に関しては、「*jazasəŋ* ＜お前は書く＞, *kilæseŋ* ＜お前は来る＞の /*səŋ~seŋ*/ は、トルコ語の *seviyorsun* の *-sun* に当る形式であるが、疑問を表す附属語 /*mə~me*/ ＜か＞が、*jazasəŋ mə*, *kilæseŋ me* のようにその後につく点より見て、附属形式であると考えられる」と述べている。

1. 3. 問題提起

上述のように、本稿で取り上げた先行研究の多くは、当該の人称標識の使用が現代タタール語の非動詞述語文では限定的であるという点で一致しているが、1）非動詞述語に付くものと動詞述語に付くものを区別するかしないか（三人称の形式は *-DEr* か Ø か）、2）接辞とするか接語とするか、に関して立場が異なっている。

1.1 節で挙げた先行研究では、表 1 にあるように、*-DEr* が三人称の述語性接辞であるとされている。竹内 (1988: 34) はトルコ語のものについて、「この第 1・2 人称の形は人称代名詞の後置によって生じた形であるのに対して、『第 3 人称』は、tur-『立ちどまる、そこにいる』という動詞語幹を起源としている。dir～(tir～) は話し手の確認ムードを示す付属語であって、『第 3 人称』とはとうてい言うことが出来ない。事実これは文の動作主が 1・2 人称であっても用いることができる」とし、以下の例などを挙げている。

(5) Bunu bil-iyor=sunuz=dur.
これ.ACC 知る-PRS=2PL=MOD
「あなたはこれを知っているでしょう。」

(竹内 1988: 35)

筆者の観察では、タタール語においても *-DEr* は (6) のように、多くの場合推量を表し、一人称および二人称の標識の後にも表れることができる。よって筆者は、*-DEr* を三人称の標識とはみなさない。

(6) Min dä andïy olï šäxes "Sin *artist*" diy-gäč, čïnlap ta
1SG も そのような 偉大な 人物 2SG アーティスト 言う-CVB 本当に
artist-**mïn=dïr**, dip quwan-dï-m.
アーティスト-1SG=MOD と 喜ぶ-PST-1SG
「私もそのような偉大な人物が『君はアーティストだ』と言うと、本当に私はアーティストなのだろうと喜んだ。」

当該の人称標識が接辞が接語かという問題であるが、述部が非動詞述語であるか動詞述語であるかに関わらず、主語の人称・数と一致する同一の形式（表 3）が接尾すること、当該の人称標識にアクセントが落ちないことを重視し、筆者は表 3 のものをタタール語の「述語人称接語」であるとして以下議論を進める。なお、三人称は *-DEr* ではなく Ø とする立場をとるため、以下三人称は取り扱わない。

タタール語の非動詞述語文で主語の人称と数は以下の A~C の 3 通りの方法で表され、1.1 節で挙げた先行研究の記述から、A が最も一般的であることが示唆される。

A　代名詞のみによって表す（例：Min tatar.「私はタタール人だ」）
B　述語人称接語のみによって表す（例：Tatar=mïn. 「私はタタール人だ」）
C　代名詞と述語人称接語によって表す（例：Min tatar=mïn. 「私はタタール人だ」）

Xisamova (2006: 73) には、述語人称接語は特に感情表出やモーダルのニュアンスを伴って、強調して言う必要があるときに用いられるとある。本稿ではその点を検証するため、タタール語の非動詞述語文における述語人称接語の出現頻度をコーパスを用いて調査し、どのような述部の場合に述語人称接語の出現頻度が高いのかを調査する。本稿で取り上げた先行研究は、名詞述語、形容詞述語、位格述語を持つ肯定文の例しか挙げていないが、筆者はこれらに加え、動詞の不定形＋モーダル述語、否定コピュラ、モーダル小辞など、述語人称接語が接尾しうる様々な非動詞述語を持つ文を対象に調査を行う。十分な用例が得られる非動詞述語文に関しては、肯定文だけでなく否定文と疑問文も調査対象とする。

2. 調査

本節では 2.1 節で調査方法、2.2 節で調査結果について述べる。

2.1. 調査方法

タタール語のオンラインコーパス Corpus of Written Tatar [7]（以下 CWT）を用いて、1.3 節

[7] 総語数約 3 億 5600 万語（2019 年 8 月現在）の品詞タグ付きコーパス（ただし、タグ付けは必ずしも正確

で挙げた A の数と B+C[8] の数を算出し比較する。以下に、CWT の検索画面と算出方法を挙げる。

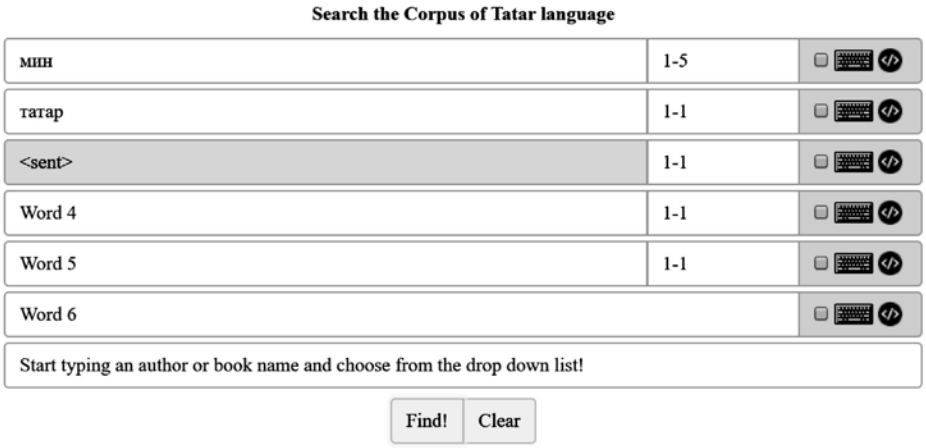

図 1：CWT の検索画面

1）A は、まずスロット 1 に一・二人称の人称代名詞を、単語間の距離を 1-5[9]としてスロット 2 に述語人称接語の付いていない非動詞述語を、単語間の距離を 1 としてスロット 3 に文末記号を意味するタグ <sent> を入力して検索する。次に、ヒットした例文からノイズ（調査対象外のデータ）を除去する。

2）B+C は、まずスロット 1 に述語人称接語の付いた非動詞述語を、単語間の距離を 1 としてスロット 2 文末記号を意味するタグ <sent> を入力して検索する。次に、ヒットした例文からノイズを除去する。

入力した非動詞述語のうち本稿で取り上げるもの[10]は以下の表 9 の通りである。

ではない)。収録されているテキストのうちマスメディアの記事が約 60%、文学作品が約 35%、人文系の学術論文が約 5%を占める。

[8] 本稿における調査は、述語人称接語の出現頻度の高い述語を明らかにすることを目的としており、B と C は分けないこととした。

[9] 単語間の距離を 1-5 として検索すると、二つの単語の間に単語もしくは記号が 0-4 個ある例が得られる。最大距離を 5 に設定した理由は、これ以上にするとノイズの割合が多くなり、除去が困難になると判断したためである。

[10] 名詞述語や形容詞述語に関しては他にも様々な語を入力して調査を行った。名詞述語は *student*「学生」と同様に B+C がほとんど見られなかったが、例外的に *tatar*「タタール人」は B+C が比較的多く見られたため取り上げた。形容詞述語は B+C が多く見られた感情形容詞 *šat*「嬉しい」と、疑問文・否定文のヒット数もある程度得られた感情形容詞 *qänäyät*「満足だ」、その他の形容詞の中でどの人称・数でもヒット数が十分に得られた *köčle*「強い」を取り上げた。

表 9：入力した非動詞述語

	述部形式	意味
名詞述語	*tatar*	「タタール人」
	student	「学生」
	kem	「誰」
形容詞述語	*köčle*	「強い」
	qänäγät	「満足だ」
	šat	「嬉しい」
位格述語	*monda*	「ここだ」
	fikerdä	「考えだ」
	qayda	「どこ」
モーダル述語	INF+*tiyeš*	「～ねばならない」
	INF+*mömkin*	「～かもしれない」
モーダル小辞	*ikän*	「～なのか」

なお、一部の形式に関しては異なる条件で検索する。用いた条件に関しては次節に個別に記す。B+C は上の条件で検索すれば述語人称接語の付いた文末述語の全数が得られるが、A に関してはノイズの数を抑えるために単語間の距離を 1-5 に設定していることから、全数は得られない。よって、A の数は B+C の数との比較のための目安[11]であることに留意されたい。

2.2. 調査結果

調査の結果、文の種類や述部要素の種類によって述語人称接語の出現頻度が異なり、特に一部の感情形容詞と位格述語、不定形＋モーダル述語、モーダル小辞を述部に持つ肯定文で述語人称接語の出現頻度が高めであることが分かった。以下、2.2.1 節で名詞述語について、2.2.2 節で形容詞述語について、2.2.3 節で位格述語について、2.2.4 節で不定形＋モーダル述語について、2.2.5 節でモーダル小辞について、それぞれの調査結果を述べる。

2.2.1. 名詞述語

名詞述語文では述語人称接語が現れないものが一般的であるが、「私はタタール人だ」にあたる表現では述語人称接語の出現している例もある程度見られた。以下、*tatar*「タタール人」を述部とする平叙文と、比較のために *student*「学生」を述部とする平叙文に関する調査結果を示す。

[11] A の全数は、単語間の距離が 5 以上のものを含むため、表 28 で挙げた数よりもやや多くなることが予想される。表 28 で挙げた A の数よりも B+C の数が少ない述語については、問題なく A の方が多いと言える。表 28 で挙げた A の数よりも B+C の数が多い述語は、最も B+C の比率が低いものでも 1.82 である。2 倍近い差があるため、A の全数が表 28 で挙げた数よりやや多くなると考えても、逆転するとは考えにくい。よって、表 28 で示した A の数は「述語人称接語の出現頻度の高い述語はどれか」を示すための目安になっていると考える。

表 10：*tatar*「タタール人」

		A	B+C
1	SG	245	112
	PL	81	7
2	SG	45	2
	PL	10	1
合計		**381**	122

表 11：*student*「学生」

		A	B+C
1	SG	49	0
	PL	9	0
2	SG	7	0
	PL	0	0
合計		**65**	0

ただし、*tatar*「タタール人」が述部であっても、疑問文では述語人称接語の出現頻度が低いことが分かった。疑問詞 *kem* 「誰」を述部にもつ疑問文でも述語人称接語の出現頻度は低い。以下、*tatar=mï?*「タタール人か？」、*kem*「誰？」を述部とする疑問文に関する調査結果を示す。なお、*kem*「誰」に関しては人称代名詞と述部間の距離を 1 として検索した。

表 12：*tatar=mï?*「タタール人か？」

		A	B+C
1	SG	0	0
	PL	5	0
2	SG	31	0
	PL	25	0
合計		**61**	0

表 13：*kem?*「誰？」

		A	B+C
1	SG	232	0
	PL	119	0
2	SG	829	14
	PL	386	3
合計		**1,566**	17

2.2.2. 形容詞述語

形容詞述語文でも (7) のように述語人称接語の現れないものが一般的であるが、(8), (9) のように *šat*「嬉しい」や *räxmätle* 「感謝している」など、一部の感情形容詞が述部の場合に述語人称接語の出現頻度が高めであることが分かった。

(7) Sin yäš, čibär, aqïllï.
2SG 若い 美しい 賢い
「君は若く、美しく、賢い。」

(8) Min sineŋ belän tanïš-uw-ɣa bik **šat=mïn**.
1SG 2SG.GEN と 知り合う-VN-DAT とても 嬉しい=1SG
「私は君と知り合えてとてもうれしい。」

(9) Bez sez-gä bik **räxmätle=bez**!
1PL 2PL-DAT とても 感謝している=1PL
「私たちはあなたにとても感謝しています！」

以下、述語人称接辞の出現頻度が高い感情形容詞 *šat*「嬉しい」と、他の感情形容詞 *qänäγät*「満足だ」、非感情形容詞 *köčle*「強い」を述部とする平叙文に関する調査結果を示す。

表 14：*šat*「嬉しい」

		A	B+C
1	SG	799	1,539
	PL	400	652
2	SG	2	0
	PL	1	0
合計		1,202	**2191**

表 15：*qänäγät*「満足だ」

		A	B+C
1	SG	385	246
	PL	207	98
2	SG	7	0
	PL	0	0
合計		**599**	344

表 16：*köčle*「強い」

		A	B+C
1	SG	42	9
	PL	118	55
2	SG	59	3
	PL	11	0
合計		**230**	67

なお、肯定文や否定文に比べて疑問文では述語人称接語の出現頻度が低めであることが分かった。以下、述語人称接語が現れている例 (10, 11) と、*qänäγät tügel*「満足ではない」、*qänäγät=me*「満足か？」を述部とする疑問文に関する調査結果を示す。

(10) Bu küčtänäč-lär-dän ber dä **qänäγät tügel=men**.
この 贈物-PL-ABL 全く 満足 COP.NEG=1SG
「(私は) この贈物には全く満足していない。」

(11) *Pensija*-gez-dän **qänäγät=sez**=me?
年金-2PL.POSS-ABL 満足な=2PL=Q
「(あなたは) 年金に満足ですか？」

表 17：*qänäγät tügel*「満足ではない」

		A	B+C
1	SG	75	44
	PL	30	11
2	SG	0	1
	PL	0	0
合計		**105**	56

表 18：*qänäγät=me*「満足か？」

		A	B+C
1	SG	0	0
	PL	1	0
2	SG	42	2
	PL	179	31
合計		**222**	33

2.2.3. 位格述語

位格述語を述部とする肯定文に関しては、(12) のように場所を表す表現では述語人称接語が現れない例が一般的であるが、(13) のように自身の考えを表明するような表現（「考え」＋位格）では述語人称接語の出現頻度が高めであることが分かった。

(12) Čönki sin äle **Mäskäw-dä**, min **Qazan-da**.
なぜなら 2SG まだ モスクワ-LOC 1SG カザン-LOC

「なぜなら君はまだモスクワで、私はカザンにいるからだ。」

(13) Min dä　šundïy　　**fiker-dä=men**.
　1SG も　そのような　考え-LOC=1SG
　「私もそのような考えです。」

以下、*monda*「ここだ」、*fikerdä*「考えだ」を述部とする文に関する調査結果を示す。なお、*monda*「ここだ」に関しては人称代名詞と述部間の距離を 1 として検索した。

表 19 : *monda*「ここだ」

		A	B+C
1	SG	410	4
	PL	171	0
2	SG	11	0
	PL	5	0
合計		**597**	4

表 20 : *fikerdä*「考えだ」

		A	B+C
1	SG	80	129
	PL	12	143
2	SG	1	0
	PL	1	0
合計		94	**278**

しかし、*fikerdä*「考えだ」が述部であっても、疑問文では述語人称接語の出現頻度が低いことが分かった。疑問詞 *qayda?*「どこだ？」を述部にもつ疑問文でも述語人称接語の出現頻度は低い。以下、*qayda?*「どこだ？」、疑問詞＋*fikerdä?*「（どんな）考えだ？」を述部とする疑問文に関する調査結果を示す。なお、*qayda?*「どこだ？」に関しては人称代名詞と述部間の距離を 1 として検索した。疑問詞＋*fikerdä?*「（どんな）考えだ？」に関しては肯定文と同じ方法で検索し、ヒットした例文の中から前の文脈に疑問詞を含む例を抽出した。

表 21 : *qayda?*「どこだ？」

		A	B+C
1	SG	157	1
	PL	47	0
2	SG	459	10
	PL	207	5
合計		**870**	16

表 22 : 疑問詞＋*fikerdä?*「（どんな）考えだ？」

		A	B+C
1	SG	0	0
	PL	0	0
2	SG	10	2
	PL	75	4
合計		**85**	6

2.2.4. 不定形＋モーダル述語

動詞の不定形＋*tiyeš*「～せねばならない／～に違いない」や、動詞の不定形＋*mömkin*「～かもしれない／～できる」を述部とする平叙文では、述語人称接語の出現頻度が比較的高いことが分かった。以下、 述語人称接語の付いている例 (14, 15) と付いていない例 (16, 17) を挙げる。

(14) Sin bez-ne qotqar-**ïrγa tiyeš**.
2SG 1PL-ACC 助ける-INF せねばならない
「君は私たちを助けなければならない。」

(15) Bez monï här ölkä-dä siz-**mäskä** dä **mömkin**.
1PL これを 全ての 分野-LOC 感じる-NEG.INF も かもしれない
「私たちはこれを全ての分野では感じないかもしれない。」

(16) Tege yeget belän ara-ŋ-nï öz-**ärgä** **tiyeš=seŋ**.
その 青年 と 間-2SG.POSS-ACC 断つ-INF せねばならない=2SG
「君はその男と関係を断たなければならない。」

(17) Ɣadiy keše ešliy al-γan-nï ešliy al-**masqa** da
普通の 人 する.CVB 取る-PTCP.PST-ACC する.CVB 取る-NEG.INF も
mömkin=seŋ.
かもしれない=2SG
「君は普通の人ができることもできないかもしれない。」

以下、不定形＋*tiyeš*「～せねばならない／～に違いない」、不定形＋*mömkin*「～かもしれない／～できる」を述部とする文に関する調査結果を示す。検索の際には不定形を意味するタグ <inf> を用いた。なお、不定形＋*tiyeš* の場合、その方法で検索するとヒット数が膨大でノイズ除去が難しいため、不定形の異形態の一つである *-arγa* を持つものに対象を限定した。検索の際には <inf> の代わりに *apra[12] を入力した。

表 23：不定形＋*tiyeš*「～ねばならない」

		A	B+C
1	SG	155	106
	PL	529	1,237
2	SG	134	225
	PL	72	111
合計		890	**1,679**

表 24：不定形＋*mömkin*「～かもしれない」

		A	B+C
1	SG	3	116
	PL	17	220
2	SG	12	255
	PL	17	220
合計		49	**811**

否定文や疑問文では、平叙文に比べて述語人称接語の出現頻度が低いことが分かった。以下、述語人称接語が現れている例 (18, 19) と、不定形＋*tiyeš tügel*「～べきでない」、不定形＋*tiyeš=me?*「～ねばならないか？／～に違いないか？」を述部とする疑問文に関する調査結果を示す。

[12] CWT の検索においてアスタリスク (*) は、「0 文字以上の任意の文字列」を意味する。

(18) Mondïy čaq-ta bez yïla-**rɣa** **tiyeš** **tügel=bez**.
こんな 時-LOC 1PL 泣く-INF ねばならない NEG.COP=1PL
「こんな時に我々は泣くべきでない。」

(19) Anda yöre-**rgä** **tiyeš=bez**=me?
そこ.LOC 通う-INF ねばならない=1PL=Q
「(私たちは) そこに通わねばならないのか？」

表 25: 不定形＋*tiyeš tügel*「～べきでない」

		A	B+C
1	SG	53	26
	PL	361	357
2	SG	80	40
	PL	31	14
合計		**555**	437

表 26: 不定形＋*tiyeš=me?*「～ねばならないか？」

		A	B+C
1	SG	110	6
	PL	62	23
2	SG	11	10
	PL	1	0
合計		**184**	39

2.2.5. モーダル小辞 *ikän*

調査の結果、(20) のようにモーダル小辞 *ikän* を述部に持つ文では、全体的に述語人称接語の出現頻度が高めであることが分かった。

(20) Sin dä monda **ikän=seŋ**.
2SG も ここに MOD=2SG
「君もここにいたのか。」

以下、*ikän*「～なのか」を述部に持つ平叙文に関する調査結果を示す。検索の際は名詞＋*ikän* を述部に持つ例を抽出するため、名詞を意味するタグ <n> を使用したが、CWT におけるタグ付けは正確でないため、*ikän* の前に形容詞や位格述語が現れる例も含まれている。

表 27：*ikän*「～なのか」

		A	B+C
1	SG	30	63
	PL	40	70
2	SG	64	691
	PL	53	399
合計		187	**1,223**

3. まとめと考察

2.2 節で挙げた調査結果を表 28 にまとめた。表の一番右の列には A に対する B+C の比率を示した（小数第三位を四捨五入）。これが 1 よりも大きいものは太字にし、疑問文と否定文の述部に当たるものには網掛けを施した。

表 28：調査結果のまとめ

	述部形式	意味	A	B+C	比率
名詞述語	*tatar*	「タタール人」	381	122	0.32
	tatar=mï?	「タタール人か？」	61	0	0.00
	student	「学生」	65	0	0.00
	kem?	「誰？」	1,566	17	0.01
形容詞述語	*köčle*	「強い」	230	67	0.29
	qänäγät	「満足だ」	599	344	0.57
	qänäγät=me?	「満足か？」	222	33	0.15
	qänäγät tügel	「満足ではない」	105	56	0.53
	šat	**「嬉しい」**	**1,202**	**2,191**	**1.82**
位格述語	*monda*	「ここだ」	597	4	0.01
	fikerdä	**「考えだ」**	**94**	**278**	**2.96**
	疑問詞＋*fikerdä?*	「（どんな）考えだ？」	85	6	0.07
	qayda?	「どこだ？」	870	16	0.02
モーダル述語	**INF+*tiyeš***	**「～ねばならない」**	**890**	**1,679**	**1.89**
	INF+*tiyeš=me?*	「～ねばならないか？」	184	39	0.21
	INF+*tiyeš tügel*	「～べきでない」	555	437	0.79
	INF+*mömkin*	**「～かもしれない」**	**49**	**811**	**16.55**
モーダル小辞	***ikän***	**「～なのか」**	**187**	**1,223**	**6.54**

調査の結果、文の種類と述部要素の種類によって述語人称接語の出現頻度が異なることが分かった。以下、文の種類と述部要素の種類についてそれぞれ考察を行う。

a. 文の種類

A に対する B+C の比率が 1 を超えているのはすべて肯定文の述部であることから、述語人称接語の出現頻度は否定文や疑問文より肯定文で高いと言える。否定文と疑問文を比べると、形容詞述語 *qänäγät* と不定形＋モーダル述語 *tiyeš* を述部とする文のいずれも、否定文のほうが疑問文よりも述語人称接語の出現頻度が高い。これらのことから、タタール語の非動詞述語文における述語人称接語の出現頻度（文の種類別）は、以下のようであることが示唆される。

肯定文＞否定文＞疑問文

肯定文に比べて否定文と疑問文で述語人称接語の出現頻度が低めであることには、否定文には否定コピュラ *tügel* が、疑問文には疑問接語 *=mE* が現れるという形態統語的要因が関係している可能性がある。特に疑問文で述語人称接語の出現頻度が低めであることは、述語人称接語が疑問モダリティとは共起しにくいことを示唆している。

b. 述部要素の種類

述語人称接語の出現頻度が高い述部（A に対する B+C の比率が 1 を超えているもの）は、高い順に不定形＋モーダル述語 *mömkin* (16.55) 、モーダル小辞 (6.54) 、位格述語（*fiker*「考え」＋位格）(2.96) 、不定形＋モーダル述語 *tiyeš* (1.89) 、感情形容詞 *šat* (1.82) となっている。これらの述部に共通するのは、すべて（疑問モダリティ以外の）モダリティを表わすか、または心情・感情を表わす述語であるということである。

不定形＋モーダル述語 *mömkin* は可能性、不定形＋モーダル述語 *tiyeš* は義務、モーダル小辞 *ikän* は意外性を表わす。よってこれらは判断のモダリティを表わすといえる。位格述語（*fiker*「考え」＋位格）を持つ文は自身の考えをはっきりと表明する表現であるため、強調や断言のモダリティを、感情形容詞は文字通り感情を表すことから、これを持つ文は感情表出や強調のモダリティを帯びているといえる。

これらのことから、現代タタール語の非動詞述語文において述語人称接語は、感情表出や強調、断言や判断などのモダリティを表す表現において用いられる傾向があると言え、Xisamova (2006: 72, 73) の「現代タタール語においては、感情表出またはモーダルのニュアンスとともに、つまり特に強調して言う必要があるときに主に使われる」という記述が、定量的調査からも裏付けられたといえる。

4. 今後の課題

本稿ではタタール語の非動詞述語文における述語人称接語の出現頻度をコーパスを用いて調査し、一部の感情形容詞と位格述語、不定形＋モーダル述語、モーダル小辞を述部に持つ平叙文で述語人称接語の出現頻度が高めであること、よって現代タタール語の非動詞述語文において述語人称接語は、感情表出や強調、断言や判断などのモダリティを表す表現において用いられる傾向があることを示した。Xisamova (2006) には述語人称接語について「現代タタール語の名詞述語文などではその使用はまれで、主に感情表出やモーダルのニュアンスを伴って、強調して述べる必要がある場合に用いられる」という、母語話者である著者の直観に基づいたと思われる記述があるが、このことが本研究による調査によっても確かめられた。さらに、述語人称接語が具体的にどのような述部に現れやすいかを示した点は、本研究の意義の一つであると言える。その他の貢献として、1）一部の先行研究で 3 人称標示とされた *-DEr* は人称標識ではないことを示したこと、2）先行研究では専ら肯定文が取り上げられているが本研究では否定文と疑問文を調べたこと、3）モーダル述語を含む場合など非典型的な述語要素での出現を調べたこと、4）サンプルの取り方がやや恣意的とは言え定量的調査を行ったこと、が挙げられる。

しかし、本稿で行ったコーパス調査に関しては、1）A の構造に関して、人称代名詞と述

部間の距離を 1-5 と設定して検索したため、5 以上離れている例がヒット数に含まれていないこと、2）述部が文末に現れている例のみを扱ったこと、3）B と C を分けなかったため、人称代名詞の有無による述語人称接語の出現頻度への影響までは調査できなかったこと、といった問題点がある。今後はこれらの問題点を解決し、より正確なデータを得る必要がある。

略号一覧

1, 2, 3		1, 2, 3 人称	NEG	negative	否定
ABL	ablative	奪格	PL	plural	複数
ACC	accusative	対格	POSS	possessive	所有
COP	copula	コピュラ	PRS	present	現在
CVB	converb	副動詞	PST	past	過去
DAT	dative	与格	PTCP	participle	形動詞
EMPH	emphasis	強調	Q	question	疑問
GEN	genitive	属格	SG	singular	単数
IMP	imperative	命令	VN	verbal noun	動名詞
INF	infinitive	不定形	VOL	volitional	意志
INFR	inferential	推量	-		接辞境界
LOC	locative	位格	=		接語境界
MOD	modal	モーダル			

参考文献

Ersen-Rasch, Margarete I. (2009) *Tatarisch: Lehrbuch für Anfänger und Fortgeschrittene*. Wiesbaden: Harrassowitz.

服部四郎 (1940)「タタール語の述語人称語尾とアクセント」『アルタイ諸言語の研究』2: 1-23.

_____ (1950) 「附属語と附属形式」『言語研究』15: 1-26.

竹内和夫 (1988) 「第 3 人称について」『言語研究』94: 25-49.

Timberlake, A. (2004) *A reference grammar of Russian.* Cambridge University Press.

Xisamova, F. M. (2006) *Tatar tele morfologiäse.* Qazan: Mäğärif näşriyatı.

Zakiev, M. Z. et al. (1993) *Tatarskaja grammatika.* T.II. Morfologija. Kazan': Akademija nauk Tatarstana.

URL

Tatar | Ethnologue (https://www.ethnologue.com/language/tat) [最終閲覧日：2018/8/23]

調査資料

Corpus of Written Tatar (http://corpus.tatfolk.ru/index_tt.php) [最終閲覧日: 2019/11/29]

Subject Person Markings in Tatar Non-verbal Sentences

Yuto HISHIYAMA
(Tokyo University of Foreign Studies)

Tatar, like many Turkic languages, has subject person markers that agree with the person and number of the subject. Previous research have shown that its use in non-verbal sentences in modern Tatar is rare and is used primarily when emphasis is needed, with emotional and modal nuances. In this paper, based on the corpus investigation, we show that the frequency of appearance of the personal markers is high especially in positive sentences with some emotional adjectives and locative predicates, infinitive + modal predicates, and modal particle. Therefore, it can be said that non-verbal predicates in Tatar tend to take the personal markers in expressions representing modalities such as emotion, emphasis, assertion and judgment, and it is argued that the descriptions of previous studies are supported by quantitative research.

（ひしやま・ゆうと　boltwatts@gmail.com）